

第二期 第十九号 (二版)

(無料)

音信不通

本のビオトープ

2018.02.20

定有堂書店 発行

シンクロニシティ

目次について

この地には琴子家がないのではないか問題

イヌの名は

ケバブジョンソン

「音信不通」からの返信

鳥取あれこれ その十八

北海道オホーツク紀行 (3)

ベートホーフエ、後期に垣間見る「恋の行く」…

さみしさはかれくさいろ

誰かの形は、私の形ではないこと。

ソローについて見えてきたもの

昼間の仕事は辞めない

遊動円木 (十)

隣人のはなし

…… 編集後記

奈良 敏行
坂本 修一

ワクサカソウヘイ

ムラカミヒロミ

齊藤 仁昭

山本 千津子

内田 克彦

芝野 浩貴

秦阜 梅林

スザワ マリコ

伊達 文

梶川 誠

古賀 啓三

五百川 知子

ドラメリア



シンクロニシティ

奈良 敏行

(定有堂 店主)

「関係の絶対性」という言葉は、ながく思考のフレームワークとなっている。時代を主導したキーワードだ。本屋で考えると、本を読む人と本を売る人が共創的に形成する空間のあり方だ。その関係性が「街」であり、「街の本屋」もそこにある。

人文書も関係性の強い本だ。本を読む人の確信が狭くなるにつれて、本屋の品揃えも狭く深くなる。人文書が、「街」(在野)でどのように手にされるのかという問いのもとに、昨年「人文会ニュース」に寄稿を求められた。人文書専門の出版社の集まりの機関誌だ。「学び系」の本屋ですから、とこたえた。

「街の本屋」定有堂が、鳥取市の若桜橋の北詰で築く「関係」が、「学び系」と気づいたからだ。本屋サークルの定有堂教室は、初期の講師によって「まちの寺子屋」と呼ばれた。また「読む会」をはじめた別の講師は「市

井の」という言葉を用いた。「街」「市井」「往来」の中で共有される物事の理解は、有効半径の狭いものだが、生活に根差しているゆえにかけがえのないものだ。

「学び系」というのは外延性のものでなく、内縁性のもものという意味で用いる。畢竟するに自分一個がどのような確信をもって生きるかだ。でも逆に自分が自分であるというのもひとつの闇だ。光を求めるとしたら「自分でないもの」に出会う必要がある。わたしの場合、「学び」とはそんな自己からの離脱でしかない。

自分でないものを求めて、先日は古書店に行った。本に呼ばれるようにして二冊手にした。丸山圭三郎『言葉と無意識』と頼住光子『正法眼蔵入門』だった。市井の「学び」は本質的にシンクロニシティに基づくことが多い。「似ている」という直感で因果関係を持ち込むものだ。生活者にはなじみ深い引き合い（共時性）の感覚だ。さして意味なく買ったつもりだったが、定有堂に戻ると、懇意にしていた禅僧の方がおいでになったので、こんなの見つけました、と包みから出した。「これ勉強になりますか？」と尋ねたら、「いい本見つけたね。でも定有堂にその本あるよ」といわれた。うっかりだった。

いい本だね、といわれた「眼蔵」の巻末資料には、その方が講談社の「本」に九年にわたって連載された「眼

蔵」をよむ」も列挙してあった。そういえばこの連載の間、P誌「本」を出版社から数十冊寄贈していただいていたのだった。連載が終わったら、ぴたりと配本が止まった。よく目が行き届いているのにびっくりした。

市井の身近な学びのひとつに、十五号に記したのだが、「必ずや滅びるべき生物体のなかに、滅びることを肯んじない心が生まれ、しかも心自身がそれを知ってしまった」（木下清一郎）という問題がある。「死」が悲しい、ということだ。手にした「眼蔵」には、入門者向けもあって簡潔に「仏教における真理の体得とは、『空』の体得に他ならない」とあった。

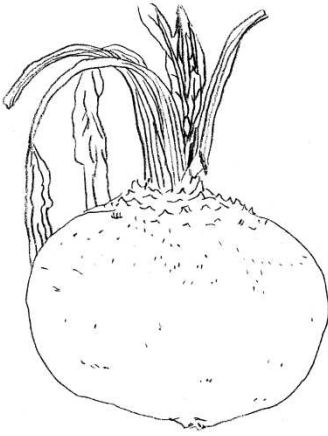
自分の解釈だから間違っているのだろうか、こんな事を考えた。「生きているのに死ぬ」のはいやだな、という気持ちがある。しかし、「空」というのは、この「生」と「死」の述語関係を否定する。「生」と「死」はそれぞれ別の立ち現れ方であって、脈絡関係、つまり因果関係はない。パラグラフ（文脈）は、入れ替え可能なのだ。本当だろうか。『言葉と無意識』は「アナグラム」について述べられた本だった。言葉を並び替えて異なる意味を見出す遊びだ。ここでは、龍樹の「中論」に「ソシユール」の先取りがあり、「すべての事象は関係によってのみ存在する」と同じようなことが語られる。

禅僧の方の座禅堂を二、三回訪ねたことがある。座つ

て何を考えればいいですか？と質問したら、「何も考え
ない」といわれびつくりした。そうか瞑想しないのか。
「生」と「死」の因果関係がアナグラムとなって逆転（異
化）するのを、じっと待つことなのだろうか。

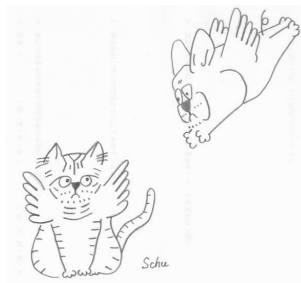
2018.01.15

（参考）「人文会ニュース」はNo.127（August 2017）をサイトで
ダウンロード可能。「本のビオトープ」というタイトルで寄稿。



beet

猫風閣ギャラリー



坂本修一

(猫風閣主人)

中のいくつかを自然にできる人もいるだろうが、私には難しいものばかりだ。できるできないは別として、いちばんはじめの「やさしい目」をしばらく意識してみたい。気持ち悪くならないように注意しながら。

*

目ということでは、T Y 堂のご堂主に「虫の目、鳥の目」というお話をうかがったことがある。ものを考えるときのヒントになるお話だった。

自作本棚の片隅に眠っていた五木寛之『大河の一滴』を読んだ。中に、仏教における布施はボランティアにも似るといふ考えが示された。ページがあり、そこで「無財の七施」といふことばを知った。お金を使わないボランティアが七つあるということだ。

やさしい目で接すること、にっこり笑いかけること、思いやる言葉をかけること、実際に体を動かして作業すること、行き届いた心配りをする、席や場所を譲ること、自分の家を提供すること、の七つがそれだ。いずれもお金を使わない。遠隔等の事情で、どれもできないときに行うボランティアが募金への協力や寄付ということになるのだろう。

募金への協力等も含め、どれも難しいことだと思ふ。

虫になって歩き、身近にある具体的なものごとのひとつひとつを正しく把握する。そして鳥になって舞い上がり、空高くからその位置関係や意味を読み取って上位概念化する。そのようなことをおっしゃったと思う。鳥瞰図と虫観図の両方をもつてものを考えようということだ。ご堂主の、ひとつ高みからものを見、発言するという姿勢を見習いたいのだが、私にはまだ実践できていない。

ただ、それを聞いて私は、具象と抽象の間の往還ということを考えた。演繹と帰納の作業と言い換えていいかもしれない。便乗だ。爾来、ご堂主の「虫の目、鳥の目」ということばも、ちやっかり使わせていただいている。

*

先日ふと、「虫の目、鳥の目」ときたらあとは「魚の目・タコ」だろう、と冗談半分でウェブ検索サイトに「虫

の目」と打ち込んでみた。すると何と、「鳥の目、虫の目、魚の目」というページが実在したのだ。この場合、「魚の目」はイボ、タコの方向ではなく、「さかなの目」と読むのが正しいとは思う。

そのページで「鳥の目」は「大所、高所から全体を見る目」、「虫の目」は「複眼で多角的に細部を見る目」、「魚の目」は「時代やものごとの流れ（潮流）を読む目」と説明されていた。魚は側線で流れの速さや水圧を捉えているらしいから、それはそれで正しいだろう。しかし私はひとつ異なる観点を付け加えたいと考えた。

虫が複眼なら、魚の魚眼を活かさない手はないと思っただのだ。魚眼では、自身の真後ろ以外はほぼ把握できるらしい。つまり、多方面に気配りできるのが「魚の目」ということになる。図にするときは、文字も考えると魚看図だ。

虫観図、鳥瞰図、魚看図。なんだかそろった感じがする。

*

つまり、ものごとに対処するには、「虫の目、鳥の目、魚の目」を持ち、「身近なことがらをしっかりと見て、大所高所から考え、流れを読んであらゆる方面への配慮を忘れない」ということになる。しかし、とても難しそう

*

十九世紀のアメリカの思想家というか、詩人でもある博物学者が、「今年はクリの木がどれほど実をつけるか、とは考えないリスを手本に生きましよう」と言っている。無為自然ということか。これもまた難しい。

それならば、甘んじて時代に流され、常識を外れないようにだけ心を配るといいうのもひとつのいき方か、とも考えた。

しかし、同じ博物学者が、「うっかりすると、最高のコモンセンスとは眠る人の感覚を指し、それを伝える言葉は軒ということになりかねません」と言っている。ページを読んで笑ってしまった。

*

虫の目だけでは大局が見えない。鳥の目だけでは細部が見えず、結局ものを見誤る。魚の目だけでは流行ばかり追い求め、気配りを通りこせば卑屈にもつながる。だからといって、いわゆる常識一筋で生きていると軒ばかりかいていることになる。

*

生きるというか、ものを考えるのは本当に難しい。いちばんいいのはリスになることか。たぶん、それがいちばん難しい。

この地には装丁家がないのではないか問題

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

私たちが生きているこの世界は、3つのゾーンにより構成されている。ひとりのゾーン、ふたりのゾーン、そして3人以上のゾーン。この3つである。

ひとりのゾーンとは、つまり「孤独」のゾーンのことである。私は文筆業だ。文筆業の本分はまさに書くことであり、そして書くことの本質とは「孤独」である。ひとりのゾーン。逃れられないゾーン。

ふたりのゾーンとは、つまり「パートナーシップ」のゾーンのことである。私という文筆業者が書いたテキストには、必ず担当編集さんがつく。彼らは皆、私のよきパートナーである。ふたりのゾーン。重要なゾーン。

3人以上のゾーンとは、つまりこれが世に名高い「社会」のことである。私という孤独から生まれたテキストは、編集者とのパートナーシップにより本となり、そして社会にやつと出現する、すなわち本屋に並ぶ。3人以上のゾーン。魑魅魍魎のゾーン。

つまり、どんなものでもひとりから生まれ、その生まれたものを3人以上の社会に提出する際には、ふたりのゾーンを無視することはできない、ということです。わかっていただけかもしれません。ありがとうございます。お帰りの際にはアンケートにご協力いただければ幸いです。出口のところで化粧品のサンプルをお配りしておりますので、是非お試しください。いや、ちがう。この話は、ここで終わりのようであって、まだもう少し続きがある。

さつき、文筆業者と編集者のパートナーシップを経由することで、テキストは本となり本屋に並ぶ、的なことを書いた。が、しかし。実はこのレールの途中、つまりはふたりのゾーンと3人以上のゾーンの間、「2,5人」のゾーンとも呼ぶべき役職が登場するのである。それが、装丁家さんだ。

日本の装丁家で有名どころといえは、祖父江慎さん(さくらももこや吉田戦車の装丁でおなじみ)、名久井直子さん(長嶋有や『ユリイカ』の表紙など)、川名潤さん(週刊モーニングの表紙や、最近だと『君たちはどう生きるか』など)あたりだろうか。私の著書のいくつかは、川名潤さんに装丁をお願いしている。

作家の仕事は、書くこと。編集者さんの仕事は、作家との伴走。で、装丁家さんはどういう仕事をしているのかというと、予算内で本の紙質を決め、表紙を決め、イラストレーターさんに発注をかけ、フォントを決め、バーコードの位置を決めて、そ

の他諸々。そう聞くといわゆるデザイナー的な仕事に思えるし、装丁家さんの中には「ブックデザイナー」を名乗る人もいるくらいだが、優れた装丁家さんは皆、高いデザイン感覚と共に、鋭利なオペレーション能力を携えている。

一冊の本をつくるために、あらゆるカードを繊細に切り、人を大胆に動かし、自分の筆先を自在に動かし。装丁家という仕事は、作家と編集者が叩きだしたテキストという素材を、キッチンやホールに指示を出しながら最後に料理して皿に盛りつけるコック長、といったイメージか。特殊で、そして不可欠な存在である。

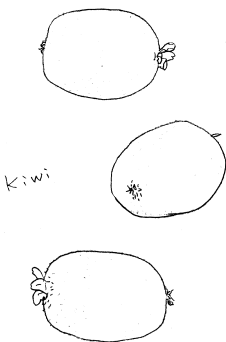
最近、出版業界に限らず、やけに「編集者の時代」的なことが囁かれるようになった世間である。鳥取でも色んな人が「トットリを再編集すること」に熱心だったりする。確かに編集は重要だ。でも、なんだろう。このまま鳥取が編集され続けても、もうこれ以上「トットリ」は見えやすくない気がしている。蟹に星に砂に和牛にスイカにオシドリに海に山に温泉に子育てに妖怪にゲストハウスにカフェに鳥に虫に本にカレーに近未来に、鳥取はバックヤードが非常に豊かだ。さすが、新幹線という針が通らなかつただけあつて、鳥取の風船内部はどんどん濃度を高める一方なのである。バックヤードに眠るこれらの濃い素材たちを、店長と相談しながらスーパーマーケットの店頭で陳列する作業が編集だとして。もうその陳列作業は、鳥取の地において達成点をすでに果たしていると思う。つまり、ふた

りのゾーンはもう越えてもいい頃合いなのだろう。その先、待ち受けているのは、「2,5人」のゾーンなのだが、スーパーマーケットの表紙やフォントを決める装丁家が鳥取にはどうにもいない。

そう、「この地には装丁家がない問題」がそろそろ叫ばれるべきなのである。

いずれ、この鳥取に装丁家は現れるのだろうか。もし現れたのなら、その時にはどのような「本」が出現するのだろうか。楽しみでならないし、どうでもいいと言えば、どうでもいい気もする。少なくともそれは、私の役割ではないからだ。

私が本日喋りたかったのは、以上のお話です。ありがとうございます。出口にて次回から使用可能な割引券をお配りしております。



イヌの名は

ムラカミ ヒロミ

〈ライオン・ブックマン〉

たのはアポロ十一号で、この時の着陸船の愛称が「イーグル」であったのは、当時を知る人の記憶にあるだろう。イーグル（ハクトウワシ）は同国の国鳥で、国章など色々なモチーフに使われている。どうも驚というのは、ハプスブルクやロマノフ、ナチスドイツを想起させ、いかにも肉食人種の自国至上主義の象徴のようで余り良い印象を持たないのだが（まあ、日本人は草食系で、菊と桐ですからぬ）。

旧臘、年賀状の図案探しに、ロシアの航空宇宙史の本をひっくり返していた。スプートニク二号に乗って地球軌道を飛行した最初の犬の絵を探していたのである。本によって、「ライカ犬」とあるものと「ライカ」と固有名詞として出ているものとあるが、打ち上げ当時、ソ連文化省が編纂した『スプートニク』（一九五八）には固有名詞として載っている。サム・ストールというアメリカ人の雑字本には最初「クドリャフカ」と呼ばれたが、外国人に発音しづらいという理由で「ライカ」に改められた、とある。ちなみにライカ犬は、ロシア原産の獵犬。

最初の人工衛星、最初の動物飛行、最初の有人飛行はみなソ連に持って行かれたが、最初の人類月到達はアメリカが勝利した。ケネディがぶち上げたとおりに、六十年代ギリギリの六九年のことであった。月面着陸に成功し

それはさて置き、そのひとつ前の十号にも着陸船は搭載されており、月軌道の周回実験が行われている。この着陸船の愛称が「スヌーピー」であったことは余り知られていない。（ちなみに、司令船－母船－は「チャーリー・ブラウン」）筆者がこれを知ったのは、月面着陸の年に読んだ日下実男のノンフィクションによってであったが、当時の日本では、スヌーピーもチャーリー・ブラウンもほとんど知られておらず、何のことやら、という感じであった。（日本版ピーナッツ・ブックスの刊行は一九六九年頃、TVアニメの放映は七十年以降のこと）

漫画でよく知られた犬としては、エルジエのタンタン・シリーズに出てくる、主人公の相棒で白いフォックステリア、名をミルウという。この名前が、フランス語圏以外では発音しにくいらしく、各国様々な名前に変え

られている。公式サイトによれば、英語圏ではスノーウイ、ドイツではシュトルツピ、ロシアはメローク。いずれも毛色や風体からの連想であろうが、中にはテリー（デンマークほか北欧諸国）、ボビー（オランダ）といったものもある。中国は、ミルウの音に「米盧」の漢字を当てているようだ。（実際は二文字目が簡体字）

ちなみに、このサイトでは、日本はミロと紹介されている。あれ、と首をかしげる方が多からう。現在流布している福音館書店版はスノーウイだからである。実はタントンの翻訳は、一九六八年の主婦の友社が最初で、この時の名前がミロであった。（フロントページの人物紹介では「忠犬ミロ」とある）「ぼうけんタントン」シリーズとして全三冊が同時刊行されたが、続巻はなかった。かつての「ブロンディ」（君よ知るや！）のような横長サイズの体裁もさることながら、漫画を児童書と位置付けて売るのが早過ぎたのではないかと思料する。手塚治虫や永井豪が悪書追放の槍玉に上がっていた時代であった。

黒いスコッチ・テリアが出てくるのは、エラリー・クイーン・ジュニアのジュヴナイルで、通称（ジュナの冒険）シリーズ。戦前から戦後に互って四半世紀続いた人気作である。

全九作で、第一作が「黒い犬の秘密」。ジュナ少年の愛犬チャンプが活躍する。この話の中で、チャンプは新しい犬小屋を作ってもらうが、その表札に「チャンピオン」と書かれている所から、どうやら、これがフルネームのようである。

小さな村のコミュニテイ、舗装されていない道、買い物は一軒しかない雑貨屋、長い木のカウンター越しに、店主が棚から品物を取って渡すスタイル、電話のある家はこれも村一軒、子供の遊びは釣り……といった古き良きアメリカが描かれている。どこか懐かしい感じがするのは、多分、昔見たアメリカ製のTVドラマの印象だろうか。

日本では、一九五七年に講談社が最初の翻訳を出し、三作を刊行。その後、早川書房が五八年から八冊を出している。学習雑誌や漫画雑誌の付録にもなり、数種類が出ているが、冒険王の付録として出た「パタゴニア号の秘密」（六〇年）では、なぜか、犬の名前がジャガーとなり、犬種もシェパードになっている。まるでハードボイルドである。

ケバブジョンソン

坪井日記 ①

齊藤仁昭

(長崎書店)

杉浦と橋本という友人と三人でケバブジョンソンというバンドを続けている。自分は三代目のドラマーで、加入してから十年近く経つ。加入時は私も東京に住んでいたが、二年前に熊本に帰郷したので現在では遠距離バンドになってしまった。これまで四枚のアルバムを制作し、東京を始め埼玉、名古屋、大阪、神戸、岡山、熊本などによく演奏に出かけている。昨年四月は台北の音楽好きたちにお呼ばれして演奏する機会があり、なかなかの手応えの演奏ができた。手前味噌だが曲と歌詞のクオリティは割り合い良いのではないかと思っている(私は作詞も作曲も担当しておらず、元々はバンドのファンであり今もそう)。が肝心の演奏はなかなか上手くならないね、というところ。あくまで趣味である。趣味と言えば聞こえが軽いが、実際のところこれで生活しようと考えることは三人揃ってないのだから外向けにはそういう言

い方になってしまふ。

先日、久しぶりに親戚の正月の集まりに顔を出した。父親や弟達、叔父や従兄弟達は私のように仕事の長続きしない、また収入に頓着の薄い人間と違ってほとんど転職もしたことがないようなサラリーマンばかりである(私は帰郷したのちに熊本市の長崎書店という本屋に勤務し始めた。不惑を前にして初めての書店業。昨年、鳥取出張の際に定有堂にお邪魔させていただきました。今回の原稿を書かせていただくご縁をいただきました)。お金の話などを車屋や保険屋、医者などにされると肩身が狭くいたたまれない。やっぱり来なきやよかつたかな。酔いもすんできた頃にふと話がバンドのことに及んだ。どんなジャンルの音楽なんだ? 売れているのか? いままで続けるんだ? 売れるも続けるも何も趣味なのだから飽きるまではやるだろう、あなた達もゴルフに行ったり釣りに行ったりパチンコに行ったりするでしょう? と言うたポカンとしている。数回会話が行き違った後に私はパンチラインを出した。だいたいバンドで食おうと思つたことないし。一同は仰天した。バンドというものは売れるためにやるものだしか思っていなかったらしい。夢。ドリーム。希望。青春。そんな類のものを私が

追いかけてみると。確かに大学には七年通った。確かに稼ぎは悪い。クレジットカードだって止まることがある。しかしだね、僕は真面目に働きたいのだよ。現に長崎書店では真面目に働いている（と思っている）。真面目に働いたうえで音楽のことを考えていきたいのだ。むしろバンドにドリームを抱いているのは親戚たちの方であった。バンドというものは仕事とは両立せず、夢として追い求めるものであると。我々のような音楽愛好家の存在を全く知らなかったのだろう。この十年ばかり会うたびに何だか気まずかったのはその行き違いのせいだったのだ。面白いと思ったものについて掘り下げて、調べ、考え、実践し、できる限り技術を向上させていく。それを一市民として行う。高じて同様の活動をしている人々との出会い、機会があれば彼らの街に演奏しに訪れる。それがいいのじゃないかなと思うし十分だと私は思っている。長く取り組んでいる一つのことがあるとそれを軸にして他の事を観察することができるようになるし、敬意も生まれるだろう。ただし、年齢とともにある一定の技術がなければ人前での演奏は控えた方がいいとは思われない。長年の誤解が解けたうえになんだか高説を言った聞いたような雰囲気になり皆で笑ってポトルが多く空いた。これで来年からの集まりは平気なはずだ。

近未来と過去を混ぜ合わせて

辿る天竺のガイド 網の目のようなコード

倍速の声で歌い出して

フィドルハーモニカバンジョータンバリン

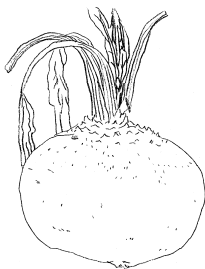
煙出す方角へバスを乗り継いで

いつもどおりにガムを噛んで 長い小さな息を吐いて

引き延ばした景色のぞき込んで

フィドルハーモニカバンジョータンバリン

(ケバブジョンソン「Fiddlers」作詞：杉浦真寛)



beet

「音信不通」からの返信



山本 千津子

(KOHKA コーシカ)

「僕にお手紙をください」と声をかけていただき、書き始めた「音信不通」への一六〇〇字。毎回、必ず十通以上の返信をいただけるのがありがたい。

鳥取に関する現在・過去・未来、日本各地の旅先から、遠くはアメリカから、自分も同じような体験をしたと共に感しながら、行きたかった展覧会の様子もわかり、かつてロシアに住んでいたこともあるので、ゴーゴリの「ヴィイ」やロシア人名にあうと嬉しくなって読んでいく。私にとって鳥取と言えば「鳥の劇場」なので、今回の第十八号を受け取った時は、二月公演「三文オペラ」の案内が郵送で届いた日でもあったので嬉しさは倍増した。公演に向けての過程を知ること、こちらも今から気持ちがあつていく。昨年は大雪で断念したので今年は何

としても行きたい。

また、十八号には金沢のことが書かれてあった。ちょうど十二月に行ったばかりの金沢の良さを共に分かち合えたような気がした。金沢には所用で日帰りのところを一泊することにした。ゲストハウスに泊まる。ゲストハウスの存在を初めて知ったのは二年前の二月、湯梨浜にある「たみ」で一か月間世界各国料理を味わえる企画があった。ロシアのボルシチに魅かれて行ってみた。お鍋を前にしている女性を見て「もうこれはおいしいに違いない」という先入観を持ってしまった。家庭の味でもあり、レストランの味でもあり……後でわかったことには、東京の有名なロシア料理店の味を教わっていらしたようだ。いつか東京のあの店へ、という夢が湯梨浜でかかった。ピロシキも作った人の個性が出ているオリジナルな形と味だった。これらの料理とともに、偶然テーブルを囲んだ人たちが作り出す場の雰囲気がとても気に入った。友人と来ていても「おいしいですね」をきっかけに前や隣の席の他人と話す。わざわざロシア料理を食べに来た人、歩いていつものように一杯飲みに来た人、大阪から米子への帰りに若者たちから学ぼうと来られた年配の経営者、部屋に戻れば若い外国人の学生と話が弾む。スタッフがいるようでない、古民家とそこに集まって

くる人の中に溶け込んでいるような感じを受けた。ゲストハウスってみんなで作っている空間のような印象を持って以来、金沢でも宿に選んだ。

金沢では「たみ」のようなカフェは併設されていなかったが、共有スペースである居間やキッチンで顔を合わす人たちが空間を作っていく。東京から町屋研究に来た大学生とのおしゃべり。スタッフの方は私の好みに合せておすすめの場所を教えてください。翌日は大雪になりそうだから、観光名所をたくさん回れそうにない。鳥取では奈良先生からコーヒーの美味しいお店やブックカフェを紹介していただいたこともあって、ほかの土地に行っても気になる。

朝からゲストハウスですすめられたコーヒー店へ行く。お店の前の雪かきに忙しくて開店は遅れそうだが、快く店内に入れて下さった。窓枠を額縁にして、降り積もっていく雪をまさに動く絵画として鑑賞しながら一杯のコーヒーをいただく。傘をさして、ひがし茶屋街へ向かったが、あきらめた。ひたすら雪の中を歩くトレーニングになってしまった。近江町市場だけは観光客で活気があった。ランチの行列。ゲストハウスで教えてもらった、ガイドブックには載っていないカフェへ。食べ物に

関する本に囲まれて大きな窓越しに降る雪を見ながら、あったかいスープをいただく。「美味しい本屋さん」そのものだった。次々とパンを買いに来る地元の人、昨日友達からもらったサンドイッチがおいしかったので、今日は自分が別の友人のところへ持っていくと注文している女の子、大学生らしき二人連れもスープを即注文。結局、この日はあったかいスープが旅の思い出となった。そしてこのお店の手作り食パンを買わなかった後悔と。次回は観光名所と古本屋と季節のスープをお目当てに訪れたい。

ここにきてやつと気が付いた。返信ではなくて、すべて店主宛へのお手紙を横から読ませていただいているのだ。そのおかげで、またお手紙も書けるし、お顔は存じ上げなくてもだんだんと親しみを感じるようになっていくのは、とても不思議。ついですが、「たみ」の今年の二月は週末カレーが楽しめますよ。



鳥取あれこれ その十八

内田克彦

(地域研究家)

あるきっかけから、砂川哲夫著『鳥取の舞台人・映画人抄 鬼蓮の白露』（一九八九年一月発行）に眼を通すことになり、私にとっては余りなじみのない名前が並んでいる中、「余録」に掲げられた「加藤朝鳥」の項を読んでいたら、「加藤みどり」について、次のように書かれていた。

若くして文学に関心のあつた妻のみどりは、結婚して、生田長江（本書別掲）の命名による平塚雷鳥主宰の「青鞥」の発行に田村俊子、野上弥生子らと参加した。

以前から、『青鞥』の関係者で、生田長江以外に、鳥取ゆかりの人物がいまいかと探していたものが見つかることができなかったもので、喜んだ。まずは、夫である加藤朝鳥とはどういう人物なのか調べてみる必要があると

考え、出生地である倉吉市発行の『新編倉吉市史第三巻 近・現代編』（一九九三年発行）に当たることにした。

一八八六（明治一九）年、倉吉市不入岡に出生。本名は信正。県立米子中学に進む。一九〇五年早稲田大学英语科に進学、〇七年、詩の雑誌『詩人』同人に参加し、一年間に七編の作品を発表。卒業後、『教育実驗界』『大阪新報』『近代』などに勤務した後、二〇（大正九）年『爪（じや）哇（わ）日報』主筆としてインドネシアに渡る。二三年日本女子高等学院英文科講師、二五年立正大学予科講師、二九年同予科教授、三二年同文学部長に就任。同年雑誌『反響』を創刊。文学評論を多数発表し、単行本、翻訳書を含めて総計三〇余冊にのぼる。ポーランド文学の翻訳の第一人者で、三〇年にポーランド政府から勲章を授与されている。三八（昭和一三）年死去。行年五二歳。

とあつた〔筆者抜き書き〕が、みどりの記載は一切無く、一九七三年発行の『倉吉市史』に、次のように触れられていた。

大正十一年（一九二二）妻菊子が死亡。菊子（加藤みどり）は女流文芸雑誌『青鞥』の同人として作家を

志し、『青鞥小説集』（東雲堂刊）などに作品を発表している。

このため、みどりは朝鳥とどのようにして知り合っただのかなど、みどりの生涯を調べてみることにした。まず、らいてう研究会編著『「青鞥」人物事典―110人の群像―』を見てみた。見開き二頁に「『新しい女』を希望しつづけた人生 加藤みどり」として簡潔に紹介しており、年表も添えてあった。抜き書きしてみる。

一八八八（明治二十一年）八月、長野県上伊那郡赤穂村に、医師の長女として生まれる（本名高仲きくよ）。九年一二月母病死。一九〇六年二月、上京、弟妹の世話をする傍ら、煙草・化粧品等を商う。〇七年一月、『女子文壇』に「愛の花」掲載。『詩人』社友に。〇八年五月、『詩人』社友近信欄に「高仲菊子は煙草商をよして専心文芸の修養に入る」と載る。学生の加藤朝鳥から巻紙三間の長い恋文が届き求婚される。〇九年七月一〇日付読売新聞「文壇はなしだね」（注参照）に、朝鳥との結婚が載る。

さて、みどりに関しては、『青鞥』研究者である岩田ななつ氏による『青鞥の女 加藤みどり』が一九九三年

に発行されていた。県立図書館には無かったので他館から取り寄せて頂く。末尾の「年譜」は、各種の文献を調査された詳細なものであったが、本文は小説であり、「あとがき」には次のとおり書かれていた。

二年前、それまでの研究をまとめて「加藤みどり小伝」を発表した時、論文という性格上書きたくても書けないことがたくさん心の中に残ってしまった（略）。みどりの小説、評論を何度も読んでいるうちに、みどりの言いたかったことが、私の理解と想像を通して言葉になつてあふれ出てくるようになった。

加藤夫妻のその後、特にみどりの短い生涯を、「年譜」に基づきながら紹介してみたい。（以下、続く）

〔注〕本年の早稲田文科の卒業生で、翻訳などをしてゐる加藤朝鳥氏は、新声誌上などでちよいちよい名を見る高仲乱菊女と久しく同棲してゐたが、今度の卒業を期して先日結婚式をあげた。徳田秋声氏が、仮親の役。列席した人は、河井醉茗、生田長江、松原至文等……（岩田著「年譜」から筆者により再引用）

北海道オホーツク紀行 (3)

芝野 浩貴

(地球探検家)

前回同様、斜里まで戻り、斜里岳の形の良さにも魅入られる。

屈斜路湖まで歩いて倒れ、釧路湿原の鳥のオケストラにグループしながらも、たどり着いた駅に列車は来なくて、また慌てて次の駅まで走った。CD化された曲の音は、ある振動数の波がカットされているので、レコードで良質の音を堪能する人が増えている。町の中で耳にする音楽は直線的に届くが、湿原では身体全体に染み渡る音というのを体験した。車窓の風景からそんなことを思い出しながら釧路まで南下。そういう原体験があるから、列車からでも、釧路湿原の大梓を捉えることができた。世界三天夕陽に釧路がなっているのも、釧路湿原の水蒸気が貢献している。西陽が水蒸気に乱反射してより紅く映えるのである。釧路は港町だから、嘗ては幣舞橋のある南側が流行っていたが(この遊郭に石川啄木は通った)、車社会となった今は、北側の県道沿いに店が並ぶ。

北海道の朝は早い。4時ごろには空が明るい。

2年前、釧路駅前のホテルに泊まった時は、天候に恵まれず、根室行きを断念した。今回は晴れである。幸いにも日曜日限定で根室への往復バス切符が三千円で売っていた。JRだと鈍行で五千円。予約制なので、前日バス乗り場に出向き受付で、「席は空いてますか？」と尋ねたら、「いつも空いてますよ」と鼻で笑われた。予約制というのは、満席の時があるからの制度だろう？でなければ駆け込み乗りでいいのだからと思っただが、笑顔で「わかりました」と返事した。実際乗車したら、私を含めて3名だった。

北海道に上陸してからも歩いてはいるものの、都市間はバスに頼る。阿寒バスのシステムは、釧路―根室間は、中間点の厚岸で運転手が変わる。根室在住の運転手は根室から厚岸まで運転して、また厚岸から根室に戻る。釧路在住の運転手は釧路から厚岸まで運転して、また厚岸から釧路まで戻る。1日に2便しか運転しないが、山岳地帯のケーブルカーや単線の市内電車や汽車の時のように、反対方向のバスが時刻を合わせるからできることで、人件費を安くするための工夫でもある。大雪地帯なので、道路が雪で埋もれた時に、「ここが道路ですよ」と教えてくれる標識矢印が5メートルおきくらいに設置してある。北海道の道路は距離が長いので、至る所設置するのにかかるの労力と維持経費をかけたなど思った。

今朝の新聞で、藻谷浩介氏が「北海道の鉄道をどうするか」のシンポジウムの基調講演で、道路の維持代より線路の維持代の方が安い。高齢化社会で運転免許を放棄して鉄道に頼る年寄りが増

えること、何より外国人はバスツアーより鉄道を利用しての旨を伝えて、廃線防止を訴えていた。概ね賛成である。都会と北海道のバスのスケールが違うのはバス停の名前でもわかる。短いスパンでランドマークがない北海道は、「田中家の前」というような個人名を使ったバス停の名前がある。個人情報はどうなるのかというより、目印がないからしょうがないらしい。スウェーデンが貨幣や紙幣を使わずにネットだけでやりとりしてるのも、土地が広すぎて、人口密度が低すぎて、有線にする工事しても元が取れないからである。地形と経済や流通の仕方も密接に関係がある。小清水から斜里の間は、じゃがいも畑がずっと続く。十勝もしかり。ドイツではジャガイモが主となるから、「ジャガイモあるところ豚ありき」が叫ばれる。豚はジャガイモを食べるからである。地形と食の関連でいえば、ドイツのビール作りも有名である。世界最古の食品に関する法律であるビール法は、「水・酵母・麦芽・ホップのみを原料として作らねばいけない」というものだ。北ドイツでは、小麦が作れなくて貴重なので、大麦でビールを作らせて、小麦は食料に回そうという意図があった。なので、小麦が作れる南ドイツのバイエルンは小麦でビールを作ることが許された。そんなことも、小樽のビール製造所を訪れた時に初めて知った話だった。ジャガイモ畑の景色や十勝豚は実際に見たが、まさか根室半島に馬や牛が多く飼われているとは知らなかった。寒いので、牧場のイメージがなかった。3時間近く釧路から根室までバスで移動したが、道中はずっと牧場だった。牛や馬の餌代が大変で、

量も足りなくなるから、安いとうもろこしを食わせて脂身を多くするのがアメリカ。広い牧草地の中に牛や馬の数はそう多くないから、ゆったりと育てられているのがわかる。十勝平野はずっと平原が続くが、根室半島も際限なく広い平原で、本州で見えなかった山や谷とはまた違う雄大なパノラマを堪能した。道東はジビエも美味しいそうだが、本家の牛はもつと美味しそうだ。

北海道最東端に近づくにつれて、日本人がどこからやってきたのか、ロシアとの国境がどうなっているのか、流水のない側のオホーツクで何がとれるのか、人が決めれない境について考えていた。ここ何年かのうちに大地震がくるといわれる断層のあるところでもある。

根室駅に着く。日本で最も東にある駅だ。最も西の駅はたびら平戸口駅で昨年行った。北の稚内駅も昨年と一昨年行った。南は鹿児島島の西大山駅。ここで注意したいのは、日本と言った時に何を指すのか？本土なのか？本土というのはどこまでのことか？西や南を考える時、沖縄の存在がある。北や東を考える時は北方領土を入れるかどうかの問題がある。伊能忠敬に蝦夷地の地図を作るきっかけを与えた地でもある。根室市役所には、齒舞諸島まで24キロ、色丹島まで155キロと表示してある。根室市としては、日本として案内している。

ベートホーフエン、後期に垣間見る「恋」の行くへ…

～聖ヴァレンティンに寄せて

秦阜梅林（やすおかばいりん）

（楽人）

I 作品 109(1820)
たった二つ、囁くやうな三度音程、応へるそれは四度の下
降音程。

ためらひがちにそつと…しかし決して咳くやうには無
く、明らかに相手に向けて語られたモチーフ、優しくこだ
まする応へ。ルネサンス ↓ バロックで散々見られた定型の
「応答」が此処で、何と浪漫的な愛の語らひ、魂の愛撫のや
うに扱われて居る事か?! 作品 109 の冒頭に置かれた主題
の提示。

さり気なくポツリポツリ語られ始め、力強いスケルツォで
ある第2楽章を挟み、第三楽章へ。簡素・静謐で美しい主題
と変奏。ピアノストとしての作家は内省に没し感受性をひた
すら澄まし、心いつばいに歌ふ事を要求して居る。…スノッ
プな魂には何ひとつ響かなひ、このロマン性に応うるなら?

「シヨパンの魁」もやがて聴かれやう…。

II 作品 93(1811～12)

北西ボヘミアの当治場フランツェンスブルン、二頭の黄金の
獅子館に長期滞在した宿泊者名簿にベートホーフエンとプ
レンタノ一家の名が見へる。此処で着々と書かれていたの
が第8交響曲。ケーニヒスヴァルトの幻想的な森の並木道。
此処をかつてアントーニエ夫人とルートヴィヒを乗せた馬車
が密かに駆け抜けたのだらうか? 優雅に穏やかに静寂の
中闊歩する其れ。歓喜の旋律、執拗に冴するポストホルンの
響き、田園の風景、どこまでも平和な牧歌、一幅の絵のや
うな交響を古典的均整の中に見事に収むる此の幸せの中、
秘められたロマンスはまう誰も決して事実を知り得ぬ事も
関係無く、「永遠の眠り」を貪っているのだらう… 謎は謎の
まゝに。

III 作品 98(1816)

後期のピアノソナタは内面告白の日記の如き物、更に約
80余り遺されたリートは折りに触れ個人的な悲喜交々を
雑記した物と見做されている。其れらは我が国では誤つてリ
ートの「相」とも見られてゐるが、さうでは無い。グルックや
ハイドゥンさうしてモーツァルトが既に数々の実りを肥沃な
地に齎して居るのだから。

けれど、此の作品98は、シューベルトやシューマンが切り開いて行く連作歌曲集、その曙光とも云へるドラマを成して居る。

ボミアの医学生ヤイレレスに拠るテキストをどういふ経緯で入手したのか？ 筆者は審らかで無いけれど、往事スラムプ状態にあつた彼は此の詩に接し、創造意欲を刺激され、一気に書き上げた由。

全曲は切れ目無く演奏され、純愛の憧れを直向きに吐露する。若者が恋人の姿を求め彷徨ふ野原の寂しき、空気はやがてシューベルトやブラームスに引き継がれる汎浪漫的な其れ。独リートに伝統的な「愛の想ひ」は此処を原点とし旅立つたとも云えやう。「遥かなる恋人に寄せて」と題された此の作品は以下 ①丘の上に腰を下ろして…と語りかけられ ②山々の青く聳え立つ所…や ③天空を行く軽やかな帆…④あの雲も… ⑤五月が再び巡つて来て… ⑥では愛するひとよ、此の歌を再び夕に歌つて、リュートの甘い調べに乗せ…と歌い継がれてゆく。

伊オペラがベルカントの華麗な舞台芸術を花咲かせた時代、アルプスの北ではウエルテルの奮達により繊細・詩的な心のドラマを詩の連なりを以て表現する試みが盛んになつてゐた。

其の先頭を、飽くまで独り行つたベートホーフエンがどこ迄も個人主義を貫き唯我独尊、ひたすら内省だけを見つめて

いたのは、或る意味暗示的である。

2017.11.28

今回ハ3枚・①L・v・ベートホーフエン Pt.ソナタホ長調 作品109 アニー・フィッシャー Pt.1958年二月録音 (EDU) ②同：第八交響曲へ長調作品88 モントゥー指揮ヴィーン・フィルハーモニー 1960録音 (テッカ) ③同：「遥かなる恋人に」作品88 Pt. ヴンダーリッヒ Ter. H シュミット Pt.1963 5月ヴィーン、ORF 奥国宮放送録音 (フィリップス)

今回の一冊・「ボヘミア・ベートーヴェン紀行「不滅の恋人」の謎を追つて」青木やよひ著 東京書籍・刊



さみじさはかれくさうろ

スザワマリコ

(考古学もの書き)

また雪の季節がやって来た。

重く厚い雲に変わりやすい空。群れのごとく舞う無数の白い粒。雪には物量と気配がある。雪の塊たる雲はリーダーで見ると無数の巨大な鱗のようで、目で見るとは灰色のカーテンが壁となつて押し寄せてくる。それそのものが、何処か意思のある生き物のようだ。

雪の時期、脳裏によぎるのは雪のない冬のこと。

まだ学生だった頃、後輩たちが実習で描いていた古墳の測量図を仕上げるというので、彼らを連れて隣町の山中の古墳群に行った。年が明けてすぐ、成人の日の頃だった。

岡山は晴れの国だと言う。だが実際は、快晴の「晴れ」ではなく、薄曇りの日が多いらしい。その日の太陽は雲の向こうにぼんやりと輪郭が見える程度で、凍えるほど寒くはなく、どこまでも秋の延長戦のような冬だった。

後輩たちは大きな横穴式石室の中に入り、測量を始めた。作業の完了を待つ間、特にすることがなかったので、古墳群を見て歩くことにした。

千五百年前くらいか、古墳時代中期以降になると、古墳群というものが盛んに造られるようになる。丘陵などに古墳が密集する。いわば集団墓地だ。

人を葬った石室には自然の石を組み合わせたもの、石を加工して板状にしたものがあり、大きなものであれば人が何人も入ることができるが、小さなものであれば子どもが一人入れるかどうか、という大きさだ。

かつては土が盛られていたのだろうが、古墳というのは目につきやすいので、盗掘にあつたり土を取られたりして、石室が剥き出しになっているものばかり。

どれも皆、墓だった。

今はもう、名も分らない誰かの。

枯れ葉を踏みしめ、墓と墓の間を歩く。落ち葉と枯れ草に埋もれる石室が、墓の残骸が見える。向こうにもすぐ其処にも見える、ずらりと並んだそのすべてが墓。

考古学は物から考察する学問だ。それ故、物は物として客観的に見なければならぬ。物は喋らない。喋らないからとにかく観察するのだが、語る口を持たない故、その物が、かつて存在した「誰か」ととつて「どういっ

た物だったか」という、ヒトの気持ちを読み取ることは非常に苦手だ。だから時々、それが誰かにとつて「特別」だったかもしれないことを忘れてしまう。

此処は奥津城。月日が経ち、何時の間にか参る人も気にとめる人も居なくなり、骨が土に還り盛り土も流れ失つて、ただ石だけが残る。けれどその石すらも、何時しか散逸して痕跡すら残らない。

墓は証拠だ。其処にもヒトがいて、そのヒトを葬ったヒトがいたこと。有ったかもしれない、此処にいたことを忘れないで、と絶え間なく叫んでいたたましいのことを考える。

どんな想いも肉体も、朽ち果てにくい墓石そのものも、いずれ何もかもが土に還る。けれど、目に見えず、溶けて消えない寂しさだけが、此処に残っている。

雪が降ればいいのに、と思う。

冬枯れした草の色ほど、冬の黒々とした川ほど、白は寂しくはない色だ。雪は優しい。何もかにも、白に覆い隠して同じにしてしまうのだから。祝福するように、ただただ白く染めること。それが溶けて癒えない寂しさへの、せめてもの行いだと思った。

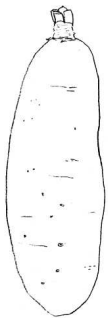
雪の季節を生きる私たちだからこそ知っていることが

ある。雪雲の合間にみえる空の青の美しさ、雪の夜の冷たいくせに不思議とあたたかい明かり。そして耐え忍んだ先にある、温かい春の有難さ。

死というものが、寂しさというものがいつも傍らにあるからこそ、生きていることが分かる。血が通っていることを教えてくれるのは、いつも冷たく優しい白だ。

後輩たちの作業は中々終わらず、やがて日が落ち暗くなった。体は少しずつ、確実に芯から冷えて、雪のない冬が冬らしく牙をむく。やっと作業が終わり、山を下る頃には、見下ろす麓の町はすっかり夜景だった。

その後入った温かい湯の有難さと、枯れ草色の寂しさは、未だに忘れられないでいる。



Daikon 当味木根

誰かの形は、私の形ではない」と。

伊達文

(人生休憩中／ノージャンルイベント)

三十代半ばを生きている。二十代半ばから三十代に入っ
てすぐまでは、背伸びをした。華やかではなかったけれど、
いろんなことをした。広くイベントに出かけたり主催したりして、
人とどんどん出会って。家の中の家具や道具を入れ替えて、
生活習慣を変えて。

しかし三十代も半分に来て、二十代に背を伸ばし手を
伸ばしたものが、自分の等身大にはならないことに気づき、
私の形は今、急速にしぼんでいる。

十代、二十代と、『ゲド戦記』を訳した清水眞砂子さんの
エッセーをよく読んだ。その中に、広告業界が作っていく、
ブランド品など、それを持っていないことを不安にさせる
物語への警鐘と、振り回される学生への心配が出てきた。
読みながら、自分はそうした外からの物語に、あまり振り
回されないほうだと思っていた。

けれど、大きな物語に振り回されにくい一方、身近な
人や本の影響はわりあい受けていて、特に「丁寧な暮らし」
に憧れた。振り回される相手が違うだけだった。伊藤
藤まさこさんや、有元葉子さん：料理や暮らしを仕事に
している人の本を読みながら、取り入れられることを自
分の暮らしに取り入れるのは楽しいことだったし、憧れ
たことで改善したことはいくつもある。

しかし、背伸びは背伸びし続けられる体力がないかぎ
り、苦しくなっていく。模倣と調整を繰り返しながら、
やがて気づきはじめる。ああ、この習慣は私にはできない
んだなど。たとえば、お気に入りのよそゆきの服を手
に入れても、ずっときれいに維持管理するマメさは自分
にはないんだな、とか。

憧れた「すてきな暮らし」は、全員が、やりたいと思
えばできるわけではない。物は、楽器と同じで、売って
いるけれど、誰でも使いこなせはしない。習慣だって、
誰もが身につけられるわけではない。素敵な暮らしは身
近(友人)から遠方(本の中)まであふれているけれど、
あこがれてやってみたらからといって、必ずできるわけ
ではないのだ。

さまざまなライフハック本は、すべての人を前提には
書かれていない。そんな顔をして並んでいるけれど。書
いた人にできること、あるいは多くの人ができるかもしれ

れないことでも、自分にできるとはかぎらない。自分の人生は、本当に自分しか歩いていないことを痛感したのが、三十代の歩みのように思う。二十代はいろんな夢を追いかけられる時期で、三十代はその夢を壊していける時期だ。

そもそも、能力以前にやりたい優先順位自体が違った。「よくなろうとする私」「他人からいろいろ言われたくない私」ではない「正直な私」「継続できる私」は、丁寧に暮らすより、だから暮らすほうが好きだ。ごろごろ寝転んですごしたいし、気が向いたときに気が向いたことしかしたくない。

そういうわけで、三十代を歩きながら、少しずつ、いろいろなことが変わった。丁寧に暮らしからは、ほどほどに離れた。自分ではないものへの憧れから身をはがし、見栄をはらはらと手からこぼしていった。それでも残ったものが、私に取り入れられる新しい芯だった。

二十代より部屋はきれいにできるようになったけれど、もとからきれいにしている人と同じやり方ではやっていない。とにかく物を減らし、一つで何役も果たす家具や道具を探しまくりに、楽ちんにきれいにしやすくしている。

いつもしゃんと座っている前提できれいな服を着ることもどうにもできないので、ゴミ捨てぐらいなら行ける。

でも毛玉ができてごろごろできる部屋着を買ってみたい。目標もやり方も自分で決めていいことを、少しずつ獲得する日々。

—あこがれがしぼんで、自分の形までしゆるる〜と戻ってきた三十代。自分ではなくなっていた形を等身大にたたんで、実態に近づける。背伸びを手放して、でも縮こまっていたときよりは広がって。私のサイズが前よりよく見えるようになったこれから、私がどこへ行くかはわからない。この形をした私にできることが、きつとあるはず。



cabbage

ソローについて見えてきたもの

—「教育」に軸に—

梶川 誠

(濫觴屋)

例えば南方熊楠のことについて、彼のことを面白いと思う学者肌の人が彼の生き方や彼の業績について述べるよう誰かに請われたとする。南方熊楠についてなら、ある人は自然科学の方面から、ある人は民俗学の方面から、それぞれ、講演の三つ四つ、本なら三冊やそこらは、一貫した内容でまとめることができるのではないか。私が同じようなことを尋ねられるとして、水木しげるのことなら「絵物語を作り続けるということ」を軸に、ストツプがかかるまで延々と話すことはできる。水木しげるのことをよく知っているなどとても言えたものではないが、子どものころから氏の著作に親しんでおり、自分なりにつかんでいる氏の全体像や、自分の見方で氏について一貫して見えてくるもの、というのが自分の中に形造

られているからだ。

「ソローについて一言で表すなら」と問われるくらいの話だったら、まったく一面的に「ナチュラリスト」「市民的不服従」「シンブルライフ」などと私も答へはする。しかし、例えばナチュラリストとしてのソローについてさらに語るように私が請われたなら、5分ほど話せば、もう口ごもってしまいそうだ。ソローの著作は断続的に読んでいけるものの、ソローについて、自分なりの全体像や自分にとつてのソローの中に一貫して見えてくるもの、というものが、これまで私にはなかったのだ。

今まで私は「教育」という観点でソローを見たことはなかった。彼のあり方は学校にそぐわない。ソローの一生を追ううちに、彼がハーバード大学とつながりの深いことはすぐ見えてきた。あの知性だ、高等教育との関わりはあつてしかるべきであろう。しかしそれにしても、彼の探求精神は、本当によい意味で(という言い方もおかしいが)「自分中心」であり、「教える、教えられる」という関係を彼や彼の生き方に見出だせない、……私にはそう見えていた。偏見もいとこだ。

灯台下暗し。実際には、その観点で見ようともしなかつたから見えなかつただけだ。たとえば岩波の『森の生活』を始め、ソローに関する基礎文献をちよつと読み直せば、短いながら、彼に教師経験があつたことがわかる。

そしてその短い教師経験が、彼に大きな影響を与えたか、もしくは彼の生き方を象徴しているか、少なくともそのどちらかであることは、間違いない。憧憬のまなざしでソローを見つめる一方で、「なんだか『学校的』ではない」と彼のことを偏見の目で見、自分とは相容れない存在のように思っていたように思う。

そのすべてについてではないにしても、ソローの歩んだ道や残してきたものは、「教育」という方面から見通すことができる。そのことは、私にとつては、という話かもしれないし、ソローについてご存知の方なら「何をいまさら」という話かもしれない。しかしそれがわかって、今、静かだが大きな興奮を得ている。

「教育」そして「力」という言葉を軸に、ソローについて見えてきたものを、以下にまとめてみる。

ヘンリー・デイヴィッド・ソローについて、私の今現在において強い関心があるのは、彼と「教育」とのかかわりである。

「教育」は学校を抜きには語れない(……と私には思えている)。しかし、『森の生活』(実際には『ウォールデン』)というタイトルの方がソロー本人的にもいいんだが)を単純に読んでいくと、そのあくなき探求精神と分析力・理解力、理論構築能力が、孤独(だと勝手に私は思っ

ている)生活の中で、見ようによっては嬉々として発揮されている様を見ると(読むと)、ソローが学校でものを学ぶなり、学校でものを教えるなり、そう言った姿は私には想像しにくかった。

しかし、まず、今の学齢期にあたる年齢のときには、ソローには失礼な言い方だが、ソローもちゃんと学校に通っている。ソローがまだ子どもだった頃のアメリカは、今我々が想像するような学校の制度はちゃんとできてはいなかったが、裕福な家庭にいたと思われる彼は、16歳あたりまで、当時の大学(「カレッジ」)入学のための、中等教育機関(今の日本なら中学校か)に通っている。大変まじめで優秀で、向上心あふれる、「学校」が似合わないどころか、学校にとつて模範的な生徒だったらしい。一方で、ソロー少年はすでに、釣竿や猟銃(一)を手に、森や川、湖を駆け巡ったり、奥へ奥へと探索していたらしい。こちらへんは、ソローはすでにソローだったんだが。

参考文献・古川明子『ヘンリー・デイヴィッド・ソローの教育思想―学校教育から生涯学習へ―』

昼間の仕事は辞めない

土賀 啓三

(米国ミシガン州 隠棲)

短編小説のようなものを、二作、ここに掲載して戴いた。

読んだ人には噴飯だろうが、自分としては結構手応えがあつて、なかというかと、全くの嘘っ人を書く練習ができたからである。

長いもので試してしくじると、辛い。千六百字という音信不通のフォーマットで試させて戴くことを思いついた。(かなり超過しちゃつてごめんなさい)

小説体験はやや長めのものを三篇書いたきりだが、基本的には『個人的な体験に深く根差した事象でなければ書けない。』といつても、私的な体験をそのまま書く訳ではなく、書かれたがつている個人的体験を、一旦ぎりぎりまで手元に引きつけておいてじつと観照し、やがて虚構の彼方に弾き飛ばす(「スリングショット効果」、と自分では呼んでいる)。『括弧内は作中で物書きである人物に言わせた文句である。スリングショット効果な

んで気が利いてるじゃねえか、とか江戸っ子風に自画自賛していたが、誰かからのパクリであることを忘れているだけかも知れない。しかし、である。三作目を書いて、『個人的な体験に深く根差した事象』はネタ切れであることに気付いたのである。

三作とも読んだ物好き、もとい読者は、僕の知つている限り、奈良さんと奥様の千枝さんだけだが(実態は頼み込んでお読み戴いたんだけど)、千枝さんの批評は一章と二章が矛盾していて意味が解らない、とか、何故毎回愛人Ⅱ賢い女が出てくるのか? 他に素材はないものか? などと鋭利ではあるものの、陽性なのでフムフムなるほど変えなくちゃ、と消化が良いのだが、奈良さんは、誰に何を伝えようとしているのか、とボディブロー気味でカウント9まで立ち上がれなかつたりする。

賢い愛人は *Wistful thinking* というやつで、残念ながら『個人的な体験に深く根差した事象』ではない。しかし、しばしば登場し、一人称で語る、アメリカ在住の、文学や美術に傾倒した中年男、をイヤ〜僕じゃないですよ、と言つてみても誰を騙そうとしているのか詮もない。舞台もサンフランシスコの大学院であつたりして、あまり『虚構の彼方に弾き飛ば』されてる感はない。

この三作は、ある意味連作で、もうひとつは書けるが、後がない。気がする。

その先も書きたいのか? 誰に何を伝えるために? と尋ねられると、書き続けたい。ような気がする。後者への回答は難しい。

これもサンフランシスコに住んでた頃の記憶だと思っ
込んでるので、正しければ八〇年代後半だと思う。ア
メリカの新聞の日曜版は分厚い。文学のことだから、Life
Style. なんていうページで読んだのだろうか。Culture
かな。新聞は San Francisco Chronicle だったのだろう
か。名前は忘れたが、インタビュで流行作家が売れる
前の生活について語っている。時代の寵児的ポストモダ
ン作家だったような気がする。ティム・オブライエンだ
ったか。

昼間は普通の仕事に付いており、この仕事が嫌でたま
らない。家に帰り、地下の部屋に籠って小説を書く際
にだけ『自分は人間に戻る。』

英語で、唄、楽器、スポーツなど、人の技量を揶揄す
る際、Don. t quit your daytime job. (昼間の仕事は
辞めるなよ) ”なんて言い方をする。

誰に何を伝えたいのかは難しいが、書く時だけ人間に
戻る、という感覚はわかる。二篇の短編から得た手応え
は、スリングショット効果が枯渇しても、なんとか人間
の振りをし続けることができそうだ、という安堵であつ
たのかも知れない。



遊動円木

(中)

書初や先づは楷書と決めてをり

齋粥常の暮しに戻る頃

兵馬桶坑の闇より虎落笛

わが町に雪三尺の伸し掛かる

漆喰の壁につららの影絵かな



五百川 知子

アシル

隣人のはなし



ドラマメリア

(座敷わらし)

先日、初めて隣人と会話をした。めずらしく通路で顔を合わせたので、挨拶だけして通り過ぎようと思ったら、「すみません、いつもうちのがうるさくて」と向こうから声をかけられる。

隣人男性は昨年の春に入居した比較的新しい住人なのだが、犬を一頭飼っている。これが正直なところ、かなりやかましい。ペット可の集合住宅だから、普通の賑やかさなら許容範囲だ。斜め下に住む大型犬“ユキコちゃん”も郵便配達人が通るたびに番犬の資格十分な声で吠えている。

ところが、これが四六時中、それこそ夜中の2時だろうと早朝5時だろうとおかまひなしにクンクンキャンキャン騒がしく、しかも2LDKでスペースは十分あるというのに、よりによって私の居住空間に近い壁際で吠えられると……まあ心中穏やかならざるものがあった。

そんなわけで、これまで普通に挨拶程度はしつつも内心マグマが煮え立っていたわけだが、話しているうちに「しょうがないかな……まあお互い様だし」とだんだん

思えてきた。「まだ一歳になったばかりで落ち着きがなくて。かわいいかわいしばっかりで、つい……すみません」と謝りながらも嬉しそうな様子や、見せられたツーショット写真の数々（ツーショット写真としか言いようのない構図だった）が、あまりに親バカ（犬だけ）丸出しだったせいもある。

顔が見える関係って大事だなあとしみじみ思う。相手がどんな人か、何を思っているのか。それがわかるだけで変わってくるものもある。仕事の上でもそうだ。

・編集後記・

年に一度の蔵書点検で、身体じゆうがバキバキです。重労働をもともしない「鉄人」になりたいものです。

ドラマメリア（編集長）

口癖で「ナラは終わった」と身の丈をますます狭くしてますが、終わったらどうする？「一から始める」
：先日、玄関に一輪のサクラを飾りました。

奈良敏行（発行人）